

飯田における「活水の群」の起こり —大正リバイバル発祥の周辺のことなど—

田添禧雄

はじめに

柘植不知人（1873～1927）によって創設された基督伝道隊のもっとも古い教会として、2019年に飯田知久町教会(1924年2月創立)と竜丘基督伝道館(同年10月創立)は創立95周年を迎え、それぞれ記念の時を持った。同時に2019年は飯田を発祥の地として起こった大正リバイバル100年記念の年でもある。

飯田に存在する「キリスト伝道会『活水の群』」(1923年1月1日に柘植不知人によって創設された基督伝道隊の系譜の教会の現在の呼称)に属する教会は、現在、飯田知久町教会、飯田入舟教会、飯田馬場町教会の三教会は日本基督教団、それに単立の竜丘基督伝道館である。信州全域まで広げると伊那基督伝道館、諏訪基督伝道館、長野栄光キリスト教会の7教会である。今日はその起こりについて述べてみたい。また、大正リバイバルの発祥の地は飯田とされるがその周辺のことも探ってみたい。

竜丘日曜学校

これらの飯田の教会のルーツを訊ねると、1880(明13)年創立の「日本メソジスト飯田教会」(現・日本基督教団飯田吾妻町教会)に遡る。

日本メソジスト飯田教会による下伊那郡竜丘村の伝道は、当時の日本メソジスト教会の機関紙「護教*」に、竜丘についての記録が、古くは1899(明

32)年 12 月 30 日以来かなりの回数にわたって存在する。そして竜丘村のキリスト教信仰の灯火を点した最初に人として、郷土史に詳しい佐藤克郎(竜丘基督伝道館教会員・元飯田吾妻町教会会員・小林洋吉の長男誠の長女信子の夫)は、下平金吾、下平俊雄(時又)、木下金作(駄科)、小林洋吉・さえ子夫妻を「竜丘の五人衆」としてあげる。(*『護教』=1891(明 23)年にメソジスト三派が合同した日本メソジスト教会の機関紙『護教』を創刊。)

日本メソジスト飯田教会は、明治 41 年頃には竜丘村の子どもたちへの伝道を「竜丘日曜学校」として始めている。はじめは長野原集会所を校舎として、後には小林洋吉の自宅が開放されている。同時に大人の伝道も始まっている。子どもも多い時は 100 余名、少ない時は 50 名位と記録されている。当時の教師は、小林洋吉、山田文子、小島良造、中平省吾、内海正紀、矢島束、下手義臣、小島讓、橋爪福弥、北澤傳の名前が挙げられている。「護教」1909(明 42)年 1 月 23 日 913 号に日曜学校の詳細が掲載されているが、「(竜丘日曜学校では)生徒を帰して後は大人数人と共に小集会を開くが常なり。当村には信徒 14 人あり。求道者亦數人あり」また「大人 30 余人の為に演説会を開き」と竜丘村に信徒が増えてきていることを伝えている。また、「護教」1910 年(明 43)年 1 月 8 日 963 号には、「龍丘心霊修養会 毎木曜夜 20 名少なくとも 15、6 名 日曜学校 70 名 入会 8 名 受洗 10 名に至る」と記されている。

1911 年(明 44 年)の日本メソジスト教会の年会記録には、「殊に龍丘教区の一円の如きは克く自修克く研究するの精神に富み毎週一次の集會を務め以て求道者を導きつつあるは教団全体の為に大に益する所あるものの如し本年爾所に於て洗礼者長野原に大人男 7 名女 1 名飯田に女 1 名ありき」と竜丘村の教勢が記されている。

日本メソジスト飯田教会は、竜丘村において日曜学校、大人の定期集會、輪番家庭集會や多くの牧師等による演説会を盛んに催している。そして「護教」には、「伝道地竜丘村は小林洋吉氏の盡力するあり。戸数 20 位の信徒を有し、その村の勢力となり居れり」と、その中心は小林洋吉氏であったと告げる。この竜丘村における日曜学校をはじめとする日本メソジスト飯田教

会の伝道活動が、上記の教会のルーツであることを覚えてほしい。

小林洋吉

この原動力は何とんでも竜丘村長野原の小林洋吉を挙げねばならない。次男小林正之（早稲田大学名誉教授）が記す「洋吉小伝」（『追憶小林洋吉』1908. p. 277）によって紹介しよう。

小林洋吉は、「明治6年(1873)長野県小林勘一郎の長男として生まれた。明26年(1893)松本にあった県の尋常中学卒、二松学舎に儒教を、鎌倉円覚寺に禅（師釈宗演）を修めたが、明治20年代末期飯田美以(メソヂスト)教会に入門、32年神戸壬四郎(かんべじんしろう)牧師より洗礼を受ける。本多庸一・山路愛山に私淑、特に内村鑑三に傾倒、内村聖書講談会に連泊参加、年末同信の近藤さえ(神奈川県大磯)とキリスト教結婚。その間青年運動に関心、長野原に輔仁会を起し、また松本時代の同志らと尚志社を創立した。明32年(1899)有志と伊那青年会を結成し幹事となり、月刊機関誌「伊那青年」の発行人として精力を傾けた。

明34年(1901)東京専門学校(早稲田大学の前身)に入学、37年政治科を卒業（特に浮田和民・安部磯雄に師事、親友に宮下友雄）して帰農。明41年(1908)英人宣教師バークレイ・F・バックストンの宗教的人格に惹かれて福岡、広島、神戸方面に三週間の求道旅行、いらい幾度か有馬・箱根などのいわゆる純福音の修養会に出席、笹尾鉄三郎・秋山由五郎・御牧碩太郎らに学んだ。この前後竜丘日曜学校を起し、礼拝のために自宅を開放、家庭から酒を追放、日曜休業を実行した。1914(大3)年バックストンを飯田に招き集会を開く。また求められるまま郡下各地に生活と信仰を語ることほぼ30年。・・・大正7年(1918)飯田天幕伝道、このころ好地由太郎を知る。翌年両親受洗、父の死を機会に寺を離れ十字架の墓石とする。

第一次大戦後複雑な請判問題にかかわり、還暦ちかくまでの10年間に苦闘、その間信仰の慰藉を与えられた柘植不知人牧師に全面没入、その落合聖会的影響のもとに1924(大13)年同志とともにメソヂストを脱して飯田基

督伝道館を起し、また竜丘伝道館を創立し、自らも新たな恩寵感に浸った。しかし同師没後、伝道館的信仰の燃焼もとのごとくならぬを自責しつつ、農耕と聖書番繙読のほかは、次第に書道、俳句、詩吟の稽古に生きた傾きがある。昭和12年(1937)長男誠大陸出生を前に癌の宣告を受けたが、最期の病床3カ月はまことに晴朗自若、凡人求道の一生は報いられた観があった。昭和12年数え年65歳で没した。(『竜丘村誌』に基づく)

B・F・バックストンの飯田への影響

小林洋吉に靈性を与えたのはパークレイ・F・バックストンである。バックストンとの出会いを彼は「我が心の旅路」(『追憶小林洋吉』1908, p.198)にこう記している。

「またつらつら胸に手を当てて考えた。これで良いだろうか。これでも生ける信仰か。なんだか靄の如く空なる如し。本当の生命如何と。また我を失えり。秋蚕も上ぞくの後繭かきを後にして、飄然名古屋に行き、神戸に行き、遂に『福岡にバックストンなる人の集会あり、これ君に最適のものなり』と教えられ、花を求むる蝶の如く、道の遠きを忘れて赴けり。

今まで接せし東西の名士教師の地上より出でたる如きに比して、神の国より天下りし如き英人宣教師パークレイ・フォウエル・バックストンの人格に接し、陶然としてひきつけらるるを覚え、この人の言ならば理屈無しに従わんと思えり。この人なら騙されても見よう、また騙す人に非ず。只我が低級さが理解出来ぬ丈なり『只信じて従うべき也』と。これが純福音の下伊那に入る初めであった」。時1908(明41)年9月である。

小林洋吉はついにこのバックストンを飯田に招く。「自分の近隣の人々にもこの靈の豊かさを与えて欲しかったのである。」(B.G.バックストン著『信仰の報酬』1999, p.243)と、祈りに祈って、日本メソジスト飯田教会において、1914(大3)年11月14日より19日に亘り、バックストン・御牧碩太郎両師による靈性修養会が開かれるのである。このバックストン靈性修養会について小林洋吉は「近時靈的要求遠近に起り来り、各々神の戦士として彌々益々奮励を要するの時とはなりぬ。」と緊張感をもって、「護教」1914(大3)

年 12 月 11 日 1219 号に、2400 字に及ぶ詳細な報告をしている。実にこの地に純福音を伝えたのはバックストーンである。

このバックストンの来飯が機縁となって飯田の地と日本伝道隊との密なる関係が生じた。日本メソジスト飯田教会に西條彌市郎が牧師に就任し、伝道補助者として佐藤邦之介、舟喜麟一等が派遣されている。バックストーンはその後再び来飯されるが、当時の日本伝道隊の多くの有名な先生方が飯田を訪れている。ウィルクス、ソーントン、御牧碩太郎、秋山由五郎、河辺貞吉、堀内文一、土肥修平、竹田俊造等である。

柘植不知人の来飯

後に飯田知久町教会の役員で、「活水の群」信徒会等でよき奉仕をされた林義二(当時日本メソジスト飯田教会の会員、後に飯田知久町教会の長老)は、小島良造(長男讓の死を契機に 1924 年 3 月、50 歳の時、30 年にわたる教員を退き献身。柘植の神学校(東京・落合の活水学院)に入学、牧師となり、平塚、広島等で伝道した。)の長男讓と同年で無二の親友であった。小島讓が教員となり給料をもらわれた時、讓はぜひオルガンを買いたいと義二に相談をされ、その頃、義二の弟省三が勤めていた東京銀座の山野楽器店から代金 120 円のオルガンを購入している。

しかし 1919(大正 8)年 8 月 17 日讓は大咯血し病魔との戦いが始まる。義二の手記によれば、「讓君の病勢も一進一退ということにて西條彌市郎牧師(当時小島家の属する日本メソジスト飯田教会の牧師)の発議にて、日本伝道隊に柘植不知人という神癒の能力を持つ不思議な人がいるから、お願いしてはとのことで遂に柘植不知人先生をお願いすることとなり、1919(大 8)年 9 月 20 日頃であったと思うがあの背の高い痩せ細った無骨の八字髭を生やした方が来られて、お祈りをせられたことも忘れ得ぬ思い出であった」と記している。(中田重治の斡旋と言う説もあるが詳細不明、両者が関わったのではなかろうか。)

林義二の手記に「この時が柘植不知人先生の御来飯の第一歩でありまし

た」と言われるように、讓の病が飯田に柘植不知人を招いたその結果、現在飯田に「活水の群」に属する4教会が存在するのである。柘植不知人は大正14年2月の説教の中で「信州飯田は古くからキリスト教が広まり純福音が行き渡っている処で、私も方々各地に沢山行った処はあるが飯田には15回ぐらい行った。」と語っているが、昭和2年亡くなられるまでにおそらく20回位は、交通弁の非常に悪い飯田に来ている。

讓は1919(大8)年11月7日遂に24歳で、愛していたオルガンを、その時まだ見ぬ竜丘教会に献げて、と遺言して天に召された。後で記すが、その願いかなってその5年後の1924(大13)年10月竜丘基督伝道館は誕生した。

実にこの讓の病をして柘植不知人が飯田へ来られることになったのである。そして、柘植不知人は同年11月に日本メソジスト飯田教会の聖会に招かれ、風越山山麓の梅林荘における準備祈祷会で大正リバイバルが起ったのである。2019年はその100年周年に当たる。

これらすべては神の配剤・摂理を思わせる。

大正リバイバル発祥の地飯田

柘植不知人がはじめて飯田へ来られたのは、1919(大正8)年9月20日小島讓の病の癒しの祈りのためであったが、その同じ年の11月に日本メソジスト飯田教会の聖会の講師に招かれている。それはいずれも西條彌市郎によるものである。9月に讓の癒しのために柘植を招いた西條が、11月に彼の牧する教会へ柘植を招くのは極自然な成り行きであろう。

そして大正8年のリバイバルは、その聖会の準備祈祷会で、柘植不知人、秋山由五郎、小原十三司らの熱心な祈りからリバイバルが起ったのである。ゆえに、飯田が大正リバイバル発祥の地と言われる所以である。そしてそのうねりはホーリネス教会、きよめ派系の諸教会へと広がったことは周知のことである。

その出来事は、森山諭、島地タイ、小原十三司等によって記録されている(『ホーリネス・バンドの軌跡—リバイバルとキリスト教弾圧』ホーリネス・バンド昭和キリスト教弾圧史刊行会編1983)。島地タイによる「信州飯田

の「リバイバル」と森山論の記録「日本の教会におけるリバイバルの歴史」、
「活水」誌にある小原十三司記録とでは、種々の点でかなりの相違、ある
いは明らかな間違えがみられる。島地は現場にいた人であるから信憑性は
高いと思われるが、本人が「何にせよ、40 年前の記憶」ともいわれる。森山
の記録は、「日本の教会におけるリバイバルの歴史」の一部として書かれて
いるもので、このリバイバル記録は多くの人が当然のごとく引用している
が、時を経てから書かれたもので、出典もなく、不自然な点もあり、各者
の相違にも戸惑う。

一方、「活水の群」の関係では、島地タイによれば祈禱会にも加わった飯
田基督伝道館初代牧師藤村壮七（現・渋谷教会牧師藤村和義の祖父）が
「1919(大正 8)年、柘植先生を送られ、驚くべき栄光を拝した。いわゆる大
正 8、9 年のリバイバルは此地(飯田)より破れ始め、後東京に移ったのであ
った」(『神の僕の生涯 ペンテコステの前後』旧版 p. 255)と記し、当事者
の柘植は、「然るに大正 8 年巡回の使命を受け、各地修養会又は各地集會に
於てこの火の流れは遂に大リバイバルの光景を拝するに至った。」(同 p.165)
と言う以上の記録を私はまだ見ていない。

その上、柘植不知人は、大正 15 年 10 月 10 日の第 16 回落合聖会の説教の
中で、「大正 8 年にリバイバルが一度起こったのですが、たちどころに消え
てしまいました。どうして消えたかという、神様の働きを崇めず、だれ
が起こしたなどと、火の元争いとなって遂に火は消えてしまったのです」と
すら言われている。

現場の日本メソジスト飯田教会も何も語らない。「活水の群」は、このリ
バイバルの重要性を否定するものではないが、ホーリネスの群れのような
捉え方はしていない。

この出来事の背後に既にその場は備えられていたともいえることを紹介
するならば、島地タイの言う「風越山の中腹にある林さん(信者)の家」とは、
林留平・眞澄夫妻の家で、林義二(当時日本メソジスト飯田教会の会員、後
飯田知久町教会の長老)の手記をご子息の虔二が編集した、貴重な資料が含

まれる、『ハレルヤ青年の半世紀＝父・林義二の奮闘手記』に、次の様に記されている。

「忘れもいたしません。風越山麓にありました、林留平さんの梅林荘にての祈祷会、大正8年8月16日より18日迄、極めて少数の人々にて開かる。御牧碩太郎、土肥修平先生を招いての特別祈祷会が開かれ、小島先生と私も参加いたし一同大いに恵まれる。」このようにこの梅林荘と呼ばれる山荘は、霊的な集まりに用いられていた特別な場所である。柘植不知人來飯の経緯と共に、この出来事と無関係ではないと私は思う。

(林留平・眞澄夫妻の家は、屋号を若松屋と言う旧家で、今は孫の飯田入舟教会員の林言彦さんが継いでいる。風越山麓にあったと言われるが、今は、風越山麓は開発され住宅地になってその面影はない。林義二さんが「梅林荘」と言われる山荘は、今は建て替えられて存在しないが、庭は当時のままで、真ん中には池があり、大きな梅の古木が今も残っていてその面影を偲ばせると言彦さんは言われる。)

飯田基督伝道館の誕生

1924(大13)年2月3日に、日本メソジスト飯田教会主流派の柘植不知人の基督伝道隊への合流という形で基督伝道隊飯田基督伝道館が設立される。

創立の事情は次のとおりである。

『飯田吾妻町教会百十五年史』(飯田吾妻町教会歴史編纂委員会編、1997)は分裂の事情を次のように記している(p.48)。1924年の日本メソジスト教会年会記録には、長野部部长北澤鉄治の報告として、飯田教会の異変の事態を、次のように述べている。

「飯田地区 八木兄(西條彌市郎牧師の後任)新に任命を受け、牧会に当たられしが、同教会内に数年醗酵せられたる信仰上の変動は茲に爆発し、従来、同教会の中樞信徒が率先となり、約8割の現住信徒は教会を離れて別団体を作るに至り、この間八木兄の奮闘容易ならず、予もまた同教会に出張すること5回に亘り、同兄に協力したりと雖も、如何ともすること能はず。」

霊火もゆる日本メソジスト飯田教会は、分裂のため信徒の大半が「別団体」に去ったと告げているが、この「別団体」とは、柘植不知人によって創設された飯田基督伝道館である。日本メソジスト飯田教会が分裂し多くの信徒がこの伝道館に移ってきたというより、藤村壮七が言うように、「教会教派に係らず、町の空屋を用いて聖会を開いた。…この聖会の時より 152 人猛然立上って、新しき群をなしここに伝道館の建設となった」。「教会教派に係らず」なのであり、また小林正之(洋吉次男)が言うように「同志とともにメソジストを脱して飯田基督伝道館を起し」、「飯田メソジスト主流派の基督伝道隊への合流」であると言えよう。

しかし、この出来事は突発的に起こったのではなく、日本メソジスト飯田教会の中にすでに長年にわたりその土壌は作られていた。『飯田吾妻町教会百十五年史』(p. 47)が言うように、その土壌となった事例は、

1909(明治 42)年、竜丘心霊修養会。

1912(明治 45)年、飯田霊性修養会を日基と合同にて御牧碩太郎を招く。

1913 年(大正 2)年、山田ふみ婦人伝道師就任。

1914(大正 3)年、バックストンによる霊性修養会を開催。

1916(大正 5)年、日本伝道隊に関わりのある西條彌市郎牧師就任。

1917(大正 6)年、「至聖会」を結成。下伊那郡下の信徒による教派教会の区別を去って主のために自由に一致して働く。好地好太郎を招く。

1918(大正 7)年、「至聖会」にて秋山由五郎、ソートンを招く。

1919(大正 8)年、秋山由五郎、柘植不知人、小原十三司による聖会を開催。

以上のような事柄によって既に純福音的な素地が養われていたのである。ことに、バックストンによって飯田と日本伝道隊との密なる関係が生じた。バックストン再度の来飯。また、当時の日本伝道隊の多くの著名な指導者が飯田を訪れている。ウィルクス、ソートン、御牧碩太郎、秋山由五郎、河辺貞吉、堀内文一、土肥修平、竹田俊造等である。ホーリネス教会の中

田重治も来飯している。

しかし、直接の引き金になったのは、日本メソジスト飯田教会員林義二の証言にみられる。(林義二「橋本先生の思い出」『子羊のごとくに—橋本正治先生』信州教会編 1976. P.96)

「飯田メソジスト教会は日本メソジスト教会の監督下にあり部長は、デー・ノルマン師でありましたが、師は極めて寛大であって、飯田メソジスト教会が日本伝道隊との深い関係にありましても大目に見て居て下さいました。しかし、ノルマン師が一時帰郷のため北澤鉄治師が部長に就任されるや西條師との間に教政上のトラブルが起こり遂に西條師は引責辞任されるや大垣のあるミッションに転任されることになりました。その様なことのために飯田メソジスト教会も大混乱となり遂に分裂することとなり柘植師の信仰に従う人々は殿町に借家いたし、飯田基督伝道館を設立する事になりました。」と記されることがその直接の原因ではあるが、1923年4月西條の辞任。遂に次年1924(大13)年2月3日、「飯田メソジスト教会主流派の基督伝道隊への合流」による基督伝道隊飯田基督伝道館が柘植不知人によって創立されたのである。ちなみに、この時飯田メソジスト教会の中軸の信徒、小林洋吉、小島良造、林義二、杉山善九郎、大原六兵衛、田中瀧三郎、林眞澄、久保田武司等々の名が見られ、伝道館設立後も、これらメソジストの人々が伝道館の中心となっている。

飯田基督伝道館と竜丘基督伝道館の創立

飯田基督伝道館(現・飯田知久町教会)の創立は1924(大13)年2月3日、竜丘基督伝道館は同年10月10日に創立している。これは分裂ではなく、言うなれば株分けであり、株分けした理由は、

第一には、創立当初、教区も下伊那全域に広がり、教勢も盛んであったので、これを地域的に飯田の中心部と下伊那郡部に分割せざるを得なかったのではないか。

第二には、小島良造の長男讓の召天によるもの。讓の遺言、小島良造の献身、それに伴い小島の住まいであった「清水屋」が伝道のために提供され

たことが、竜丘基督伝道館の創設に深く関係する。

そして第三は、小林洋吉のかねてからの竜丘伝道に関わりがあるのではないか。飯田基督伝道館創立も小林洋吉が中心であり、竜丘基督伝道館もそうである。小林の伝道によって竜丘村には信徒も多く、当時は徒歩で飯田まで行っていたから竜丘に教会設立を望まれたことは当然の成り行きである。

当時は、洗礼式や集会もしばしば飯田と竜丘と合同で行っていた。しかし、ある事件から 2011 年に私が就任するまで、飯田と竜丘は没交渉になってしまった。それは、竜丘基督伝道館第三代牧師高橋三津平は、1933(昭和 8)年 11 月 23 日、飯田基督伝道館で「主の再臨近し」という題でホーリネスの小林廉直による再臨運動の集会が開かれたが、その時から「活水の群」も含めて他教会との交わりを絶った。それまでは近隣の教会の集会に参加させていたが、この時高橋は直感でこの集会は危ないと信徒を参加させなかった。果たせるかな飯田基督伝道館は飯田活水教会(現・飯田入舟教会)とに分裂し痛手を負った。高橋の判断でその災いは竜丘には及ばなかったが、それ以来竜丘は外部と没交渉の状態が続くことになる。高橋は再臨運動の集会を危険視したのだが、高橋没後それが拡大解釈され、他とのすべて交わりを拒否するに至った。しかし 2011 年に一信徒が、高橋先生が「教会で何か困ったことがあった時には『活水の群』の教会に頼みなさい」と言われたことを 40 年たってふと思い出した。そこで竜丘と伊那の役員が渋谷教会の藤村和義理事長の所へ「竜丘と伊那に牧師を斡旋してほしい」と依頼に行き、その結果、私がここにいる次第である。ちなみに竜丘基督伝道館の出身者また深い関わりのある方々を挙げれば、元最高裁判事、弁護士・中平健吉、早稲田大学名誉教授・小林正之、諏訪基督伝道館牧師・小林良雄、青山学院大学名誉教授・鈴木有郷、元小樽市立病院院長・小林義康、元東京 YMCA 総主事・小林道彦、新教出版社社長・小林望、元日本基督教団神戸教会牧師・岩井健作・溢子等々の方々がおられる。(敬称略、故人も含む)

このようにして今、飯田には、飯田知久町教会、飯田入舟教会、飯田馬

場町教会、竜丘基督伝道館と伊那基督伝道館、そして信州には諏訪基督伝道館、長野栄光キリスト教会の7つのキリスト伝道会「活水の群」所属の教会がある。

(日本基督教団隠退教師、竜丘基督伝道館・伊那基督伝道館 牧師)